「みことばをもてなす」

年間第16主日・C年（16.7.17）

走り出て迎え地にひれ伏した

それでは、早速、今日の第一朗読から、少し丁寧に振り返って見ましょう。この個所ですが、旧約聖書の最初の書物『創世記』の18章からとられており、わたしたちの信仰の偉大な先祖であるアブラハムが、なんと三人の旅人の姿で訪れた神のことばをもてなす感動的なエピソードを伝えております。

舞台は、中近東の暑い真昼のさなか、数張（すうはり）の天幕が張られている場所であります。そこで、アブラハムが自分の天幕の入り口で少し日陰を受けながら暑さを避けて座っていたと言うのであります。そのとき、目を上げて見ると、何と三人の旅人が彼のほうを向いて立っているではありませんか。一瞬（いっしゅん）、驚いた**「アブラハムは、すぐに天幕の入り口から走り出て、迎え、地にひれ伏して」**申し上げました。**「お客さま、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。水を少々持って来させますから、足を洗って、木陰（こかげ）でどうぞひと休みなさってください。何か召し上がるものを調（ととの）えますので、疲れをいやしてから、お出かけください。せっかく、僕の所の近くをお通りになったのですから。」**

なんと心のこもった客人（きゃくじん）のおもてなしでしょうか。ちなみに、ここでいわれている**「何か召し上がるもの」**というのは、直訳すれば**「一（ひと）かけらパン」**ということなのですが、実際にアブラハムがふるまったのは、中近東ではとても豪華な料理にほかなりません。ですから、彼の謙虚なもてなしの心尽くしの最高の接待だったといえましょう。

ところで、その料理を満喫した客人ですが、突然、重大な発表をしたというのであります。

「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう。」

すでに99歳になったアブラハムと、88歳になったサラが待ちに待った一粒種（ひとつぶだね）にほかなりません。

「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。・・・あなたの子孫はこのようになる。」（創世記 15.5）との大変ありがたいおことばが、とうどう実現するというのであります。

ですから、みことばをいともねんごろにもてなしたアブラハムに、神の約束がいよいよ実現するというまさに良い知らせ一福音にほかなりません。

必要なことはただ一つだけ

次に今日の福音ですが、まさにこの第一朗読の延長線上にあると言えましょう。つまり、妹のマリアこそが、みことばであるイエスの話に聞き入ることによって最高のもてなしが出来たと言う極めて大切なエピソードであります。

ですから、舞台は変わって、マルタとマリアという姉妹の住むベタニアの家になります。

そこで、この姉妹のそれぞれがイエスをどのようにもてなしたのか、その大きな違いに注目して見ましょう。

まず、姉のマルタですが、最初から**「いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていた」**というのであります。それだけでなく、なんとイエスに向かって**「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせておりますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」**と、なんとぶしつけにも客に向かって命令したというのであります。とにかく、食卓の準備に忙殺されていたマルタは、客であるイエスを見失い、結局、自分自身にがんじがらめになっていたのではないでしょうか。

そこで、このようなマルタに対して、イエスは、優しくお応えになられました。

「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことは、ただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それをとりあげてはならない。」と。

とにかく、姉のマルタは、**「いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていた」**ということですが、それはまさに**「あるべき中心から引き離され、周囲の雑事に心が散り散りになった」**状態に陥っていたことにほかなりません。

一方、妹のマリアは、初めから**「主の足もとに座って、その話に聞き入っていた」**とのであります。ここで言われている**「足もとに座る」**ですが、まさに

権威ある先生の教えに耳を傾ける弟子の姿勢であります。

つまり、先生であるイエスの講話に熱心に耳を傾ける弟子の姿であります。従ってこのマリアこそ**「あるべき中心」**の足もとに座り、イエスのおことばを、まさに一言も聞き漏らすまいとひたすら耳を傾けたいたのではないでしょうか。

ですから、イエスはマルタを諭（さと）して**「必要なことはただ一つだけである。」**と宣言なさったのであります。つまり、師であるイエスのおことばに真剣に耳を傾けることこそが、まさに最高のもてなしにほかなりません。　しかもイエスに聞くことこそ、まさに信仰の原点と言えるからであります。ですから、パウロも次のようにイエスのことばを聞くことの大切さを強調しております。

「『主の名を呼び求める者はだれでも救われる』のです。

ところで、信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。・・・実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストのことばを聞くことによって始まるのです。」（ローマ 10.13-17）

実は、すでにモーセの時代から、み言葉を特に子どもたちに語り告げることの大切さは、次のように強調されていたのであります。

「今日、わたしが命じるこれらのことばを心に留め、子どもたちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝るときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。」（申命記 6.6-7）

今週もまた、派遣される家庭、職場、そして地域社会において共にみことばを聞き、それを互いに分かち合うことができるように共に祈りましょう。